

《実践報告》

「阿賀町子ども未来フォーラム」における ワークショップデザイン理論からの考察

田中 一裕 (新潟大学)

2018年より、阿賀町教育委員会主催で「阿賀町子ども未来フォーラム」(以下、フォーラム)が開催されている。阿賀町は新潟県の東部に位置し、福島県と県境を挟んでいる山間地であり、近年の少子化・高齢化問題が大きな課題であり、町もその対策に取り組んでいる。このフォーラムもその一つとして、小学生を中心に、中学生・高校生・大学生・町役場職員などが多数関わり、開催されている。

本研究では、5年間で4回実施されたフォーラムのワークショップの改編について、ワークショップデザイン理論から分析をおこなうとともに、インストラクショナルデザインの視点から、フォーラムを主催したフォーラム推進委員会や阿賀町教育委員会の取り組みについて考察を行う。

キーワード ワークショップデザイン インストラクショナルデザイン

1. はじめに

新潟県阿賀町は、新潟県の東部に位置し、福島県と県境を接し、町の中央を阿賀野川が流れその沿岸の段丘を中心に開けた山間地域にあるⁱ。2005年の津川町、鹿瀬町、上川村、三川村の4町村による合併で誕生した阿賀町の当時の人口は1万5千人であったが、現在は1万人弱となり、高齢化率(総人口に占める65歳以上人口)は2020年には50%に迫っている。毎年5月に実施される「つがわ狐の嫁入り行列」では、多くの観光客を県内外から集客するイベントとなっているが、人口の減少は町の大きな課題として捉えられている。阿賀町過疎地域持続的発展計画(令和3年度～令和7年度)ⁱⁱでは、「本町における最重要課題は、『人口減少とそれに伴う少子・高齢化』であり、このまま進行すると、地域社会における担い手世代の減少による地域活力の衰退、集落機能の低下により維持困難になる集落の増加が想定されます」と危機感を募らせており、「平成17年の合併以前から過疎の防止と地域の振興を図るため、過疎対策に基づき積極的に各種施策を推進した結果、交通や通信施設等のインフラ整備、子育てや教育環境の充実、医療体制の整備等により生活環境は改善されつつありますが、依然として人口減少に歯止めがかからず一層効果的な対策を継続して進める必要があります」と課題解決に向けて取り組みをおこなっている。この計画では、「9 教育の振興

ア 学校教育」において「コミュニティ・スクール制度の導入により、『地域でどのような子どもたちを育てるのか』、『何を実現していくのか』という目標やビジョンを学校と地域住民等が共有し、力を合わせて学校の運営に取り組み、地域とともに特色ある学校づくりを進めています」と対策を講じている。具体的には、「阿賀町の次代を担う人材を育成するため、地域や学校の特色を生かした活動を推進し、地域のよさを知り、社会や自然に積極的に関わる15年教育を柱とした学校教育の充実を図る」としており、地域学習を人材育成の中心として実施することを目指している。

このような経緯の中、2018年よりフォーラムが開催されている。「ふるさと未来にわたることができること」と副題が付けられ、阿賀町文化福祉会館で、小学生・中学生・高校生・大学生が一堂に会し、阿賀町の未来のために何ができるのかを真剣に話し合うフォーラムが実施された。筆者は前年より、町教育委員会より推進委員長を依頼され、計画立案からフォーラムに携わっている。また、このフォーラムのワークショップには、新潟大学創生学部生もファシリテーターやライターとして参加し、町役場職員も参加している。

本研究では、フォーラムの振り返りデータから、4回にわたるフォーラムのワークショップの改編について、フォーラムを主催したフォーラム推進委員会や阿賀町教育委員会の取り組みを、ワークショップデザイン理論(山内・森・安斎2021)ⁱⁱⁱから分析をおこ

なう。さらに、インストラクショナルデザインのADDIEモデル(ガニェら2007)から、具体的な取り組みについて考察をおこなうことを目的としている。

2. 教育デザインとワークショップ理論

1) 教育デザイン

高橋(2011)は、「人間形成の営みを、学校の授業の中だけにとどめるのではなく、教師の教えと子どもの学びを、教室や学校空間、地域コミュニティ、多文化が共生する国際社会、地球環境という同心円状の広がりの中でとらえ直そうとするときに、まさに抜本的な『教育デザイン』が求められる」^{iv)}と述べており、学校の授業以外の学びを創造していく教育デザインについて、その重要性を明らかにしている。大島(2009)^{v)}は、教育デザインがこれまでの分析科学の教育研究アプローチと異なる点を次の通り挙げている。①混沌した場面で学習をデザインする点である。教室環境などにおいては、多くの変数が制御不可能な状況で混沌としていることが日常的であり、変数のダイナミックな変動が様々な相互作用を生み出す環境の場面での学習理論の構築となる点である。②単独の変数に焦点化せずに複数の従属変数の相互作用について、その関連性などについても分析する点である。③形成的評価を目的としており、学習場面に合わせて臨機応変に学習を修正し、教師やその他の支援者などの学習支援の関わりについても注目する点である。このように、教育デザインにおいては、学習設計を含めた中での学習環境のデザインを目的としており、学習効果の有効性を高めることだけではなく、教育デザインに参加した教師などにも反省的に振り返りをおこなうことで資質の向上を目指すことが可能となる。

2) ワorkshopデザイン理論

ワークショップデザインについて、山内・森・安斎(2021)^{vi)}が、詳細に分析を行っている。本研究では、ワークショップの基本構造として、「①導入・活動1(知る活動)・②活動2(創る活動)・③まとめ」の4ユニットの構造にもとづき分析をおこなう。またそれぞれの環境において、最適な教育効果をあげる方法の設計を行うことを目的としたインストラクショナルデザイン(ID:教育設計)を進めるにあたり、活用されるADDIEモデルを用いることで、

詳細についての考察をおこなう。ADDIEモデルは、「分析(analyze)→設計(design)→開発(develop)→実施(implement)→評価(evaluate)」というプロセスを繰り返すことにより、より良い教育プログラムや、ワークショップの開発を目指すものである。

3. 阿賀町子ども未来フォーラムの概要

2018年より実施されたフォーラムの概要についてまとめる。2020年度は新型コロナウイルス感染拡大により中止されたが、2021年度オンラインでの実施などの取り組みの変化もあり、2022年度まで実施内容や方法を変化させながら、継続している。

表1 各年度別ワークショップテーマなど

年度	ワークショップテーマ	参加者	会場
2018	ふるさとの未来に、私たちができること	小学生, 中学生, 高校生, 大学生, 阿賀町町民, 保護者, 阿賀町内企業職員	阿賀町文化福祉会館
2019	『わたしたちが創る10年後のふるさと』～自分の未来を想像し、帰ってみたいくなる阿賀町を創造する～	小学生, 中学生, 高校生, 大学生, 阿賀町町民, 保護者, 阿賀町内企業職員	阿賀黎明中学・高校体育館
2020	中止		
2021	学びを生かし未来につなぐ	小学生, 中学生, 高校生, 大学生, 阿賀町町民, 保護者, 阿賀町内企業職員	オンライン
2022	君の学びは、君の未来、町の未来へつながる	小学生, 大学生, 阿賀町町民, 保護者, 阿賀町内企業職員	津川小学校体育館

4. 2018年度の概要と分析

1) 2018年度の概要

2018年度は、小学校7校、中学校3校、高等学校1校の参加となり、阿賀町文化福祉会館を会場とし

て実施された。フォーラムの構成は①各学校で実施されている「総合的な学習の時間」での成果発表、②ワークショップ、③パネルディスカッションである。

①各学校の発表内容は次の通りである。

- 津川小 「阿賀野川と人々の暮らし」
- 三郷小 「古紙回収～私たちの心を繋いでくれたもの～」
- 鹿瀬小 「高齢者の方との交流を通して」
- 日出谷小 「エゴマで町おこし！」
- 上条小 「阿賀町の素晴らしさを伝えます」
- 西川小 「上川の民話語り」
- 三川小 「三川の宝三川鉾山の未来を考える」
- 阿賀津川中 「阿賀町発信活動～エゴマで伝えよう
阿賀町の魅力～」
- 三川中 「合唱組曲『阿賀野川』について」
- 阿賀黎明中 「阿賀町発信プロジェクト～エゴマを通して～」
- 阿賀黎明高 「防災～教科『地域学』より～」



写真 1 発表の様子 (2018 年広報あが 2 月号より)

②ワークショップでは、小中高校生を全て含んだグループを作成し、そのグループに町役場の職員がファシリテーターとして、大学生がライターとして話し合いをリードした。



写真 2 ワークショップの様子 (2018 年広報あが 2 月号より)

③パネルディスカッションでは、パネラーとして神田町長、阿賀町勝手応援団小林さん、森林科学館明石さん、阿賀黎明高校 PTA 会長石川さん、コーディネーター役を筆者が担当し、「ふるさとの未来に、私たちができること」についてのディスカッションを実施した。

2) 2018 年度の振り返りデータと考察

2018 年度は、初回のワークショップということもあり、「①導入・活動 1 (知る活動)・②活動 2 (創る活動)・③まとめ」の基本構造に近い構成となっている。フォーラムの最初に、①導入・活動 1 (知る活動)として、各学校での取り組みをそれぞれの児童・生徒が紹介する。次に②活動 2 (創る活動)として、ワークショップを小グループに分かれて実施し、最後に③まとめとして、パネルディスカッションで、大人たちがワークショップと同じテーマでディスカッションを行うという構造としている。

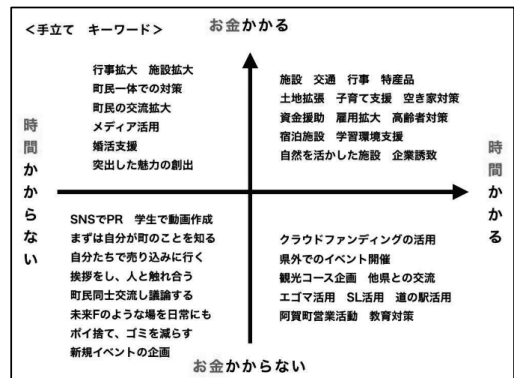


写真 3 パネルディスカッション

参加した学校教職員、教育委員会職員、町役場職員

による振り返りから考察をおこなう。

「議題や進め方はメンバーの意見を拾いながらうまく進めていたと思う。多少、ファシリテーターやメンバー構成によって話し合いの深さに差が出ていたように思われる。それはしかたがないが、支援者として各学校の職員がいるのだから入ったほうがいいと思う。(自分の学校のこどもの様子も見て回りたいのも分かるが。)」

「ファシリテーターや大学生はどなたも一生懸命だったが、一部の方は児童・生徒との話し合いに慣れていない様子だった。ファシリテーターやライターの役割を奪わないようにしながらも、こどもたちが話しやすい雰囲気づくりのお手伝いをしたり、意見を出す手助けをしたり学校職員であればやりやすいのではないかなと思う。」

「学校関係者が入った班は、子どもの意見を聞き、振り分けていたり、座っているだけでなく、立ったり、動いたりして活動を活性化していて、子どもの意見を上手く引き出していた。」

「班によってファシリテーターの力量の差が顕著であった。答えを誘導されている場面が多くあり、特に小学生は自分の意見を伝えられたい、何を言っているのか分からなかったりして、次第に黙っている子が多かった。中・高にまかせればよいというお話だったが、中・高の生徒も課題が共有されていなかったと思う。」

「小学生がなかなか話し合いの中に入れないような姿が見受けられた。議題が難しかったか。」

「子どもたちが萎縮してしまっただけで話し合いが難しかった。交流する時間や、アイスブレイクを考える必要があると思う。」

「大学生のライターには、役割について事前に指導が必要だったのではないかな。」

「一部の生徒ですが、最初ファシリテーションに乗り気ではなかったり否定的な意見が多かったりしたが、最後に「話し合いも意外と面白いなあ」と言っていたのでやってよかったなあと思った。当たり前だが、こどもたちが行政的な部分（こんなことができる、このくらいお金がかかる、このくらい規模になる等…）で知らないことが多いので、もう少し考える材料があれば、さらに盛り上がったかもしれない。」

初めてのワークショップでもあり、事前の研修などを実施して臨んだフォーラムであったが、児童・生徒が阿賀町の未来について一緒に考える場を設けることそのものに、大きな意義があったと考える。

①導入・活動1（知る活動）にあたる各校の取り組みの発表は、それぞれの学校での1年間以上の活動成果であり、各校とも力の入った取り組みであった。

②のワークショップでは、ファシリテーターの力量により、グループによっては、話し合いが十分にできない場合や、まとめが難しい場面が出てきたことが振り返りから読み取れる。ただ、今回は最終的な成果物（テーマに対する提言）以上に、小中高校生・大学生・町役場の職員がひとつのテーマについて真剣に議論する場を共有できたことは、児童生徒にとって貴重な

体験となったと考える。当日は阿賀町文化福祉会館の廊下まで、ワークショップの場所として利用するなど、会場の狭さがやや窮屈な印象があったが、「多くの変数が制御不可能な状況で混沌としている状態のなか」^{vii}、他のグループの話し合いなどに刺激を受け合っており、とても熱気あふれるワークショップとなった印象が強い。また、提案された内容を、町議会に提言するなどの意見も出たが、提言するまで練り上げられた内容にする時間はなかったため、実現は見送られた点は以後に課題として残った。

③パネルディスカッションでは、大人たちの活動や提案などについてのディスカッションをおこなうことで、このフォーラムのまとめとする構造であるが、残念ながら小学生にとっては、パネルディスカッションでの内容への理解が足りず、十分なまとめとすることができなかった点が、反省として残った。小中高校生が一堂に会するフォーラムとして、地域活性化につながる知識や理解度の差に課題が残った。

5. 2019年度の概要と分析

1) 2019年度の概要

2019年度は、前年度の評価を受けて、「①導入・活動1（知る活動）②活動2（創る活動）③まとめ」のなかの③まとめが簡略化される構成へ改編した。

はじめに、①導入・活動1（知る活動）として、各学校での取り組みをそれぞれの児童・生徒が紹介する。次に②活動2（創る活動）として、ワークショップを小グループに分かれて実施し、最後に③まとめとして、推進委員長の講評という形で全体をまとめている。

会場は、阿賀黎明中学・高校の体育館となり、小学校3校（併合のため前年の7校から減少）、中学校3校、高等学校1校、創生学部生、町役場の職員等が参加して開催された。

以下が①導入・活動1（知る活動）にあたる、それぞれの学校の発表内容である。

津川小学校 「阿賀町と私たちの暮らし」

上川小学校 「阿賀町のよさを伝えます～雪椿商品開発プロジェクト～」

三川小学校 「伝えよう！三川鉱山」

阿賀津川中学校 「郷土学習～阿賀町で働く人と、未来を想う人に触れる～」

三川中学校 「合唱組曲『阿賀野川』について」

阿賀黎明中学校 「Our Hometown, Agamachi～英語でガイドに挑戦」

阿賀黎明高等学校 「阿賀町の防災について」



写真 4 発表の様子（教育委員会報告書より）

②活動 2（創る活動）としてのワークショップでは、『わたしたちが創る 10 年後のふるさと』～自分の未来を想像し、帰ってみたいくなる阿賀町を創造する～というテーマのもと、体育館で各グループが膝に「エンタくん」を載せ円形を着席し、新潟大学創生学部生・町役場の職員がファシリテーターとして話し合いを進め、最後には各グループが話し合いの成果を発表した。

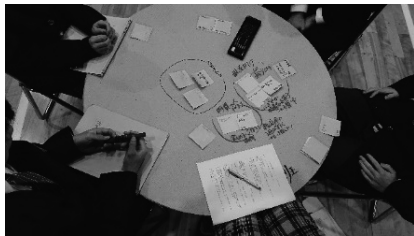
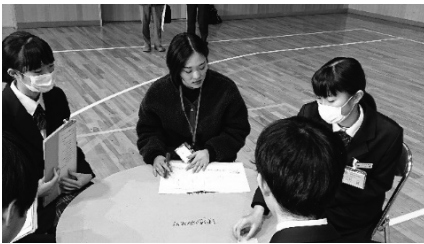


写真 5・6 エンタくんを囲んで（教育委員会報告書より）

2) 2019 年度の振り返りデータと考察

2019 年度は、前年度の振り返りから、「③まとめ」について簡略化した点が大きな改編である。その要因として、前年度の最終目的を町への提言として最終的にポスター発表を行うための議論に、多くの小学生がついて行けず、またパネルディスカッションの内容について小学生に対応できない状況にあった点が大きい。また前年度は午前中から始まり、夕方までの長時間で小学生に疲れが見えた点も大きい。そのため前年度の丸 1 日の開催から、各学校で昼食を済ませてから午後始まりのフォーラムへと縮小するうえで、③まと

めが簡略化された。

次に②活動 2（創る活動）として、ワークショップを小グループに分かれて実施する点については、前年同様であるが、体育館という広いスペースでエンタくんという丸い段ボールを膝に載せてのワークショップ形式にする改編が行われた。また前年度は、提案するというゴールがはっきりと決められており、小学生にとっては難解な提案などについていけない状況も発生したことから、2019 年度は、ゴールの設定を低めにし、小学生・中学生が分かれてグループを作成し、話し合いに参加できることを目的としたワークショップとした点が特徴的である。

参加した学校教職員、教育委員会職員、町役場職員による振り返りから考察をおこなう。

「ファシリテーターの方がうまく子どもの意見をつなげてくれたり、広げてくれたりしたのでありがたかった。進め方に関して、小学校・中学校・高校それぞれの考えが聞けるように仕組まれてあってとてもよかった。」
「私たちが思っている以上に、このフォーラムで体験したことが子どもたちの記憶に残り、阿賀町のことを考えられる人材に育っていくのではないかと思います。」

「子どもたちは頑張っていた。ただ、言葉や着眼点の差はあれ、どの班も似たような話題であったと感じました。折角、子どもたちを集めるのであれば「阿賀町」に人を呼ぶために、新しい行事を考えよう。」位のダイナミックさがあっても良いのでは。」

このフォーラムにおいて、2 回目のワークショップの構成であり、前年度の反省を生かして、小中高校生の混合のグループのなかで、小学生・中学生が話し合いに参加できるかどうか、ファシリテーターの町役場の職員や大学生への事前打ち合わせを実施し臨んだ。前年度の反省を生かし、ワークショップのメンバーを混合とせず、小学生だけのグループ、中学生と高校生のグループの 2 パターンのグループ分けをおこない、町役場の職員と大学生がファシリテーターとしてワークショップを進める形式とした点に特徴がある。

6. 2020 年度の概要と分析

1) 2020 年度の概要

新型コロナウイルス感染拡大により、中止された。

7. 2021 年度の概要と分析

1) 2021 年度の概要

2021 年度は、初めてのオンラインでの実施ということで 2019 年度の構成を引き継ぎ、③まとめが簡略化される構成となっている。また、開会式と閉会式は一堂に会しての実施であるが、開会式後に全ての参加者がブレイクアウトルームへ割り振られ、①導入・活動 1 (知る活動) として、各学校での取り組みをそれぞれの生徒が、ブレイクアウトルーム内で発表する構成へと改編した。次に②活動 2 (創る活動) として、ワークショップを引き続き同じブレイクアウトルームでのグループで実施し、最後に③まとめとして、一堂に会しての閉会式で推進委員長の講評という形で全体をまとめている。

フォーラムのねらいは「阿賀町の小中高校生が、学びを伝え、共有するとともに、多くの大人と交流することを通して、『今、そして未来の自分やふるさと阿賀町』について考えることができる」として、参加者は小学校 3 校、中学校 2 校、高等学校 1 校、創生学部生、阿賀町職員など多様な学校・組織からの参加があった。

以下が①導入・活動 1 (知る活動) にあたる、それぞれの学校の発表内容である。

- 津川小学校 「阿賀町の人に取材しよう」
- 上川小学校 「阿賀町の未来を拓く～人口減少に対して私たちができること～」
- 三川小学校 「三川鉱山・草倉銅山・新潟水俣病と、もっと阿賀町を〇〇したいです」
- 阿賀津川中学校 「故郷を愛し、故郷の未来と自分の生き方を考え行動できる生徒」
- 三川中学校 「持続可能な地域づくり」
- 阿賀黎明高等学校 「地域学 (阿賀学)」

②活動 2 (創る活動) としてのワークショップでは、各学校が研究し発表したそれぞれの内容について、事前に設定した質問をおこない、それについて答える形式で、ワークショップを進めた。

2) 2021 年度の振り返りと考察

前年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止され、2021 年度は初めてのオンラインでの開催となり、オンライン実施そのものに対する不慣れな点と、オンライン上でのワークショップの実施の効果について、全く手探り状態で企画・実施された。

事前の打ち合わせ会議では、オンラインにおけるワ



写真 7 オンラインでの様子 (広報あが1月号)

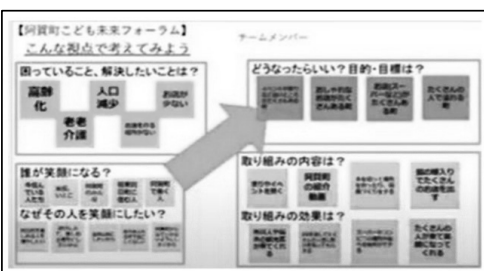
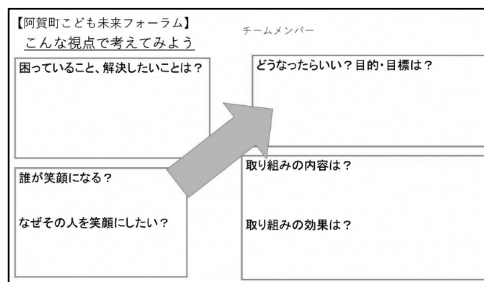


図 2・3 成果物 (広報あが1月号)

ークショップの実施内容・実施方法などに多くの議論が集中した。オンラインでの実施について不安な点に関しては、事前に各小学校・中学校・高等学校を結び、シミュレーションを実施したこともあり、動画・音声など大きなトラブルはなかった。またワークショップにおいても、児童・生徒との事前の練習などを各学校で実施したことから、カメラに向かってしっかりと話し合いができたと言える。

事後の振り返りについては次のような意見が出ている。

「少人数のグループで、子どもたち一人一人が自分の言葉で総合の学びを話す場が大変良かったです。ぜひ次年度以降も取り入れていただきたいです。」

「内容が盛り沢山だったように思う。内容を精査して、発表と共有の時間が必要だと思った。ファシリテーションは、大人や大学生の方がうまく進めてくれたので、次回もお願いしたい。」

「小学生の感想と、中学生や高校生の感想が同じレベルであったことが残念でした。指導する側として反省すべきこととして受け止めました。中学生や高校生に対しては、もっともっと鋭角的に追い込まないと、当事者意識をもった取組になりません。今回は、今までの学びに裏付けされた発言ではなく、大人が求める汎用性のある発言に終始していたように感じ

られたことから、発達段階に応じた学びの場にすべきことが課題と感じました。」

「ファシリテーターの事前研修として、当日の進め方はもちろんですが、児童生徒の実態把握も必要だと考えるので、阿賀学の活動と一緒に参加することを条件付けたりするのはいかがでしょうか？ 学びを知る、共感した大人が進めるということは大きいし、実効性のある取組になると思います。」

「小学生だけの参加がいいと思います。中学生や高校生も一緒だと、閉会式で話し合いの内容についてシェアする時に、最後まで話を聞くのは、小学生にとって大変だなと思いました。」

また、初めてのオンラインでの開催についても次のような振り返りの意見が出ている。

「オンラインで実施可能なことがわかったが、直接会って対話することも大切にした。」

「オンラインでも開催できたことには価値があります。町教委の皆さんには感謝します。しかしながら、当校の実態として熱量が感じられなかったことと、学びを生かした発言ができていなかったことから、対面での実施を強く望みます。また、オンラインで実施すると、ファシリテーターの力量に大きく左右されることも対面での開催を望みます。」

「オンラインでも様々な生徒とやり取り出来てよかったです。ただ、マイクの管理や、名前が分からない(キャリアの名前があるだけで表示されない)と生徒同士のコミュニケーションがしにくいように思いましたので、そういった点が改善されると更に良いのではないかと思います。」

このように、オンラインで実施したことについて肯定的な意見が中心ではあるが、対面での実施を希望する意見が多く出された点に特徴がある。

8. 2022 年度の概要と分析

1) 2022 年度の概要

2022 年度は、津川小学校の体育館を会場として、3 年ぶりに対面で開催された。テーマは「君の学びは、君の未来、町の未来へつながる」として、小学校3 校と、新潟大学創生学部生、町役場の職員の参加で開催された。最も大きな変更点は、小学生のみの参加になった点である。

フォーラムの構成として、①導入・活動 1 (知る活動) として、小学校での「総合的な学習の時間」の取り組みについて「阿賀学の発表」をおこない、②活動 2 (創る活動) としてワークショップを実施し、③まとめは簡略化される構成となっている。

以下が①導入・活動 1 (知る活動) にあたる、それぞれの学校の発表内容である。

上川小学校 「阿賀町が誇る美しい水」

三川小学校 「三川の歴史から見えた阿賀町の発展

～過去・現代から学び、未来を考える～

津川小学校 「未来へ受け継ごう 阿賀町」

②活動 2 (創る活動) は「大人になっても住みたい阿賀町」をテーマとして、3 校の小学生が混じったグループに、創生学部生・町役場の職員がファシリテーターとして入り、ワークショップを実施した。



写真 8 グループワークの様子 (教育委員会報告書より)

1 アイスブレイキング	・ グループのみさんに自己紹介しましょう。
2 「大人になっても住みたい阿賀町」について自分の考えを発表しましょう。	・ 前もって付せんに書いた考えを伝えましょう。
3 「今の阿賀町」について、感じていること、阿賀町の抱えている問題について知りましょう。	・ 今の阿賀町について感じていることを発表しよう。 ・ 「実際」の阿賀町の問題について知りましょう。
4 「大人になっても住みたい阿賀町」にするためのアイデアを話し合いましょう。	・ 学校で学習したことをもとに、アイデアを付せんに書いて、話し合いましょう。
5 「大人になっても住みたい阿賀町」にするために自分がしたいこと、大人になつてみたいことを付せんに書いて発表しましょう。	・ 今の自分がしてみたいこと、大人になつてみたいことを付せんに書いて発表しましょう。

図 4 グループワークの具体的進め方

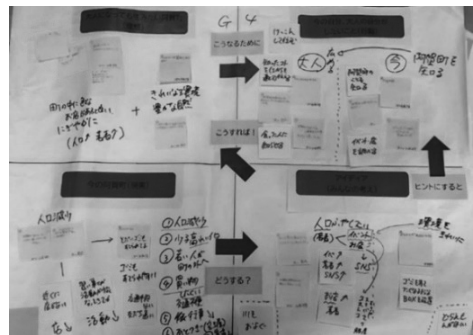
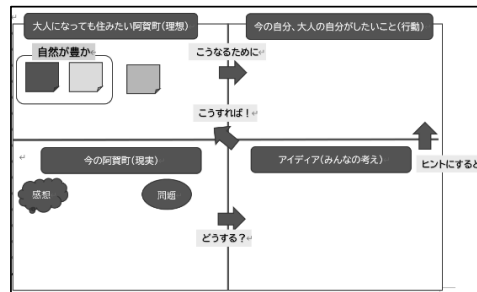


図 5・6 グループワーク成果物

2) 2022年度の振り返りと考察

この年は、3年ぶりに対面での実施となり、津川小学校体育館で一堂に会した。計画当初、対面での実施か、オンラインでの実施か日程の決定が不明確となり、直前での決定に小学校・中学校・高等学校の日程の調整が大変難しいことなどから、規模を縮小して小学校3校のみの参加で実施された点が、大きな改編であった。また新型コロナウイルス感染への備えや、実施方法などにおいて、小中高校生全てを集めての開催は、慎重にならざるを得ない状況であったことから、小学校3校での開催となった。

これまで、小中高校生混合のワークショップの実施から、小学生だけのグループによるワークショップへと変更されたため、前半の各校の取り組み発表を含めたフォーラム全体の構成について、事前に打ち合わせがおこなわれた。事前の会議では、計画案が8つ提案され、検討が進められた。事前の計画案は次のとおりである。8つのフォーラムの形式について、詳細な分析から計画が進められている。

【plan 1】ファシリ+テーマ設定型（テーマ討議重視型）

①町教委提案テーマについて、ファシリテーションを通じて考えをグループでまとめ、全体シェアする。

②講評

(メリット)

- ・「町の未来」について学習成果を基に話し合うことで、地域学習とSDG'sを関連付けた学習の意識付けがされる。

- ・他校の学習を概要的に知ることができる。

(デメリット)

- ・児童生徒の主体性が担保しにくい

- ・ファシリテーターの力量が必要。

- ・話し合い、討議の成果が活用されない。

【plan 2】ワークショップ1型（成果交流重視型）

①各校が小グループを編成し、それぞれに学習成果を発表する。

②講評

(メリット)

- ・他校、異校種の実践を幅広く知ることができ、阿賀学の成果を共有しやすい。

- ・参加する保護者等にも学習成果を伝えやすい。

(デメリット)

- ・児童生徒の発表だけにとどまると、参観者との深まりが生まれない。

【plan 3】ワークショップ2型（成果交流重視型）

①各校が制限時間内で学習成果を発表する全体会を位置付ける。その後、小グループによる学習成果発表とする。

②シェア（感想発表）

③講評

(メリット)

- ・各校の学習の根幹や大まかな内容を知ることができる。

- ・ワークショップで詳細を知ることができる。

(デメリット)

- ・どれほどの深まりがあるか。

【plan 4】ワークショップ3型（ミニレクチャー+成果交流型）

①地域を学ぶことの大切さをゲストティーチャー（2名程度：10分くらい）からミニレクチャーしていただく。

②各校学習成果（中間発表）を発表する。

③小グループによるワークショップ

④シェア

⑤講評

(メリット)

- ・地域を学ぶ大切さについて共有できる。

- ・各校の学習を共有できる

(デメリット)

- ・学びの深まりが期待できるか？

【plan 5】ファシリ・テーマ学校提案型（児童生徒主体）

①各校で学習してきたことを踏まえ、フォーラムで話し合いたいことを提案する。

②このことについて、ファシリテーションを通じて話し合い、考えをまとめる

③全体でシェアする。

(メリット)

- ・児童生徒の主体性がある程度期待できる。

(デメリット)

- ・やはり学校での意識醸成がカギ

【plan 6】テーマ学校提案パネルディスカッション型

①各校で話題にしたいテーマを申し出、これについて各校代表（2名くらい）とゲストティーチャー（代表）がパネル討議する。

②他の児童生徒はフロアとして参加する。

(メリット)

- ・児童生徒の主体性が期待できる

(デメリット)

- ・すべての児童生徒が参加主体となりえない。

【plan 7】テーマ学校提案+ファシリ+パネルディスカッション型

①各校学習成果発表

②パネルディスカッション（代表児童生徒、ゲストティーチャー等）

③意見交流（パネラーの意見についてフロアで意見交流）

④シェア

⑥講評

(メリット)

- ・plan 6よりは児童生徒の参加感が高まる (デメリット)

- ・時間がかかりすぎる、内容が盛りだくさんか。

【plan 8】提案型

①学習成果を踏まえ、町づくりについて検討し、プレゼンする。

(メリット)

- ・達成感や一定程度味わえるか。

(デメリット)

- ・そもそもそこまで狙いとしていない

最終的に、2022年度フォーラムについては、【plan 3】ワークショップ 2型 (成果交流重視型) が採用され以下の構成となった。

①各校が制限時間内で学習成果を発表する全体会を実施 (ステージ発表)

②小グループによるワークショップ

『住みたい町は?』大人になったときに住みたい阿賀町は? そのために行けることを話し合う」をテーマとしてワークショップを実施。

③シェア：各グループが全体に発表する

このplan 1～8までの構成について、ワークショップデザイン理論の「①導入・活動 1 (知る活動)・②活動 2 (創る活動)・③まとめ」にもとづく構成となっており、また小学生だけのワークショップと、会場を小学校の体育館で対面での実施方法などと組み合わせるうえで、教育効果を上げる工夫がされている。また、各校で実施された「阿賀学」について、その後の話し合いで、有効的に生かすことができる方法を模索して構成をデザインしている点は注目に値する。

この年の全体的な振り返りデータはまだ、整理されていないため、大学生の振り返りデータを示す。

「行政に大人の意見は反映しやすいが、子供の意見を発する場は少ない。

そこでこのような機会でも子ども目線の意見を聞くことができた。学校問わず子供たちの意欲的な発言が印象的だった。開催する側の教育委員会や学校の先生、役場の職員などの姿を見て、年齢に合った導き方に感銘を受けた。」

「発表を聞き、皆がしっかり話せており、内容が充実していて優秀だと感じた。その後のワークショップでは、自分たちは思いつかない素朴な疑問や面白いアイデアがあり小学生らしいと感じる面もあった。教育委員会や学校の先生、役場の職員の皆さんが、子どもたちに任せる所は任せて、大切にしながらも自立を促しているように感じた。このフォーラムに参加して、小学生、中学生、大学生、地域の方、学校の先生など普段関わることのない人たちと協働することができ、誰にとっても良い刺激になるので、有意義な取り組みだと考えた。ワークショップで提案したことを実行する

かどうかまでに意味があると思う。」

2023年度に、規模は縮小されて実施されたフォーラムではあったが、大学生の振り返りデータからも、小学生用にワークショップの構成や実施内容・実施方法について、詳細なデザインをおこなうことにより、教育効果の高いワークショップをデザインすることの可能性を感じた。

9. まとめ

1) インストラクショナルデザインにもとづく改善

児童・生徒を対象としたワークショップデザインについて、5年間4回のフォーラムを事例に分析を試みたが、5年間一人の教育委員会職員が企画立案・運営を行ったわけではなく、複数の担当職員によりフォーラムを構成してきた実践例である。本研究ではいくつかの理論やモデルにもとづき分析してきたが、フォーラムの多くの関係者が、議論をおこない、前年までのフォーラムの評価にもとづき次年度の計画・立案をおこなっている経緯がある。5年に及ぶ打ち合わせ会議での、教育実践者のフォーラムにおける教育効果向上への工夫は、大変きめ細かく、児童・生徒一人一人の特性まで考慮された構成となっている。

2) ADDIEモデルからの分析

ADDIEモデルは、「分析 (analyze) →設計 (design) →開発 (develop) →実施 (implement) →評価 (evaluate)」のプロセスをもとに、ワークショップを改編してきた5年間を、次の観点から分析をおこなう。

①ワークショップの参加者とグループ分け、②ワークショップでの役割、③ワークショップの実施方法、④ワークショップ会場、の4つの視点からワークショップのデザインを変化させている。特に、以下はその一覧を示す。

表 2 各年度別ワークショップグループ分け・役割別一覧

年度	①ワークショップグループ分け	②ワークショップでの役割
2018	小学生・中学生・高校生の混合	ファシリテーター (阿賀町町民・保護者・阿賀町内企業職員・阿賀町役場職員) ライター (大学生)
2019	小学生グループ、中高年生グループ	ファシリテーターのみ (阿賀町役場職員・大学)

	プへ分離	生)
2020	中止	
2021	小学生グループ、 中高校生グループへ分離	ファシリテーターのみ (阿賀町役場職員・大学生)
2022	小学生グループのみ	ファシリテーター(阿賀町役場職員 ライター(大学生)

表 3 各年度別ワークショップ実施方法・会場一覧

年度	③ワークショップ実施方法	④ワークショップ会場
2018	ゴールを提案に定めて、各グループが話し合い(模造紙、付せん)、ポスター発表実施	阿賀町文化福祉会館
2019	エンタくん利用で、グループ別に各自が出した意見をまとめて発表	阿賀黎明中学・高校体育館
2020	中止	
2021	グループ別に各自が出した意見をまとめて発表	オンライン(ブレイクアウトルーム)
2022	エンタくん利用で、グループ別に各自が出した意見をまとめて発表	津川小学校体育館

ADDIEモデルから、4回のフォーラムを振り返ると、実施後の関係者の評価が、翌年のフォーラムに反映され、有効に働いている方法・内容は引き継がれ、そうではないものについては、次年度に改編をおこなっていることが明らかになった。4回のフォーラムの改編について、前年の評価がどのように、次年度の改編への改編へつながった点についてまとめる。

3) 2018年の評価をもとに2019年の改編内容

①ワークショップの参加者とグループ分け

2018年度の小中高校生混合のグループ分けを、2019年度は小学生グループと中高校生グループに分離している。これは、前年度の評価で出されていた、小学生が自分の意見を十分に発言できない、という反省から、改編された部分である。

②ワークショップでの役割

2018年度では、多くの町役場職員を中心に地域の大人がファシリテーターとして入り、大学生はライターとして補助の役割を主に担った。多くの町役場職員

の動員に支えられたが、事前の打ち合わせ会議などの設定や実施がかなり大変な作業であったことから、次年度はファシリテーターとライターを分けない役割分担としている。

③ワークショップ実施方法

2018年度では、課題の分析から提案までを一つの論理的な構成としてワークショップのなかで作成し、ポスター発表も実施された。ゴールとするポスター発表に向けてファシリテーターは、短時間のなかでかなり強引に提案の作成まで進めなければならない部分もあった。この実施方法は、特に小学生が議論に参加することを難しくした要因となり、2019年度では、最終的な発表についてワークショップのなかで出てきた意見を併記して、発表する方法へ改編した。

④ワークショップ会場

2018年度では、阿賀町文化福祉会館で実施したが特にワークショップを実施する部屋が少なく、廊下などでも実施せざるをえなかった。そのため2019年度は、一堂が会することが可能な体育館での実施へと変更された。

4) 2019年の評価をもとに2021年の改編内容

①ワークショップの参加者とグループ分け

2019年度実施と同様に、小学生グループと中高校生グループに分ける方法を継続した。

②ワークショップでの役割

2019年度で、町役場職員と大学生が、ファシリテーターの役割を担い、ライターの役割を兼ねる方法を継続した。

③ワークショップ実施方法

2019年度実施と同様に、最終的な発表についてワークショップのなかで出てきた意見を併記して、発表する方法とした。

④ワークショップ会場

最も異なった点は、対面からオンラインへ変更した点である。2020年度は中止されており、2021年度も対面での実施が困難と判断され、オンラインで実施した。オンラインでの実施が最初に決定したことから、2019年度の方法を継承することで、主催者の負担を大きく減らすことができた(各校の取り組みの発表はブレイクアウトルームでの実施となった)。

一方、オンラインでの実施そのものに対する負担は大変大きく、町役場職員や小中高校をオンラインで結び、ビデオや音声のチェックなどについても入念に準備をおこなうことで、実施が可能となった。

5) 2021年の評価をもとに2022年の改編内容

①ワークショップの参加者とグループ分け

2019年度・2021年度実施と同様に、小学生グループと中高校生グループに分けて実施した。

②ワークショップでの役割

2019年度・2021年度と同様に、町役場職員と大学生が、ファシリテーターの役割を担い、ライターの役割を兼ねる方法を継続した。

③ワークショップ実施方法

2019年度で導入したエンタくんを利用して、最終的な発表についてワークショップのなかで出てきた意見を併記し、発表する方法とした。

④ワークショップ会場

津川小学校体育館での実施となった。

6) まとめ

5年間で4回実施されたフォーラムであったが、毎年、推進委員会と役員会とにより、フォーラムの全体的な流れからワークショップの詳細にいたる点まで、

参加した児童生徒にとって阿賀町の未来を考えるきっかけとなるべき体験としたいという目的のもと、議論が続けられた。児童生徒が「どのように考え」「どのように行動するのか」など自校の児童生徒のシミュレーションをおこない、改編に努めた様子が、5年間の資料から読み取ることができる。

小学生・中学生・高校生・大学生・大人まで幅広い年齢層が参加するワークショップを構成することは大変困難であり、5年間のフォーラム構成の議論に参加できたことで、ワークショップの意義や目的・内容・方法などについて、理論と重ね合わせることにより、筆者自身がさらに深く学ぶことができた。また、大学生がこのような町をあげての大きなイベントで、大切な役割を任せられるとともに、小中高校生とともに地域の未来を考えるという貴重な経験になったと考える。

今後は、まだ明らかになっていないフォーラム構成に関わる教職員の経験知を言語化することによりワークショップデザインにおける教職員の役割を明らかにしていきたいと考える。

ⁱ 阿賀町ウェブサイト, Retrieved from https://www.town.aga.niigata.jp/machi_shokai/agamachinitsuite/820.html (2023年2月14日)

ⁱⁱ 阿賀町ウェブサイト, Retrieved from <https://www.town.aga.niigata.jp/material/files/group/3/kasokeiakaku.pdf> (2023年2月14日)

ⁱⁱⁱ 山内祐平, 森玲奈, 安齋勇樹 (2021). ワークショップデザイン

論. 慶應義塾大学出版会

^{iv} 高橋勝 (2011). 教育デザインと教員養成の質の高度化, 1.

^v 大島純, 大島律子 (2009). エビデンスに基づいた教育: 認知科学・学習科学からの展望, *Cognitive Studies*, 16(3), 390-414.

^{vi} 山内祐平, 森玲奈, 安齋勇樹 (2021). ワークショップデザイン論. 慶應義塾大学出版会, 17-18.

^{vii} 前掲注v, 390-414.